日中戦争日記

第三巻　華南侵攻戦

村田和志郎

鵬和出版

日中戦争日記

第三巻 華南侵攻戦

村田和志郎

鵬和出版

著者略歴

明治三十六年十月　福岡県嘉穂郡碓井村生まれ
大正十二年三月　福岡県立嘉穂中学校卒業
昭和三年三月　明治大学法学部独法科卒業
昭和五年二月　陸軍幹部候補生
昭和五年十一月　陸軍歩兵伍長（予備役編入）
昭和十二年九月　召集、歩兵第百二十四聯隊所属
昭和十三年六月　陸軍歩兵軍曹
昭和十五年四月　召集解除
昭和十九年二月　臨時召集（将第一四六一部隊、
造第一一四〇部隊、隼第一六六
六七部隊等に所属）
昭和二十年三月　陸軍歩兵曹長
昭和二十年八月　現地召集解除

日中戦争日記　第三巻

昭和五十九年七月十五日　初版発行　定価千五百円

著者　村田和志郎

発行者　竹内　洋

発行所　鵬和出版
東京都目黒区八雲五―十―一―二〇一号
電話（〇三）七一七―四三三六(代)
振替口座　東京　八―四九六一九番

製版　法規書籍印刷株式会社
印刷
製本　長崎製本株式会社

（落丁本・乱丁本はおとりかえいたします）

ISBN4-89282-023-7　Printed in Japan

目次

昭和十三年

十月一日　乗船……7
十月二日　呉淞沖へ出航……7
十月十二日　バイヤス湾上陸……28
十月十九日　伝単「親愛証」……46
十月二十二日　広東入城……51
伝単「日本農民大衆ニ告グ」……53
十月二十三日　広東市内掃蕩……55
十月二十六日　広東郊外出発、燕唐へ……59
十月三十日　熱発……68
十一月八日　蚊帳徴発……77
十一月九日　三名行方不明……79
十一月十一日　シャーリ・テンプル写真入手……86

十一月十一日　捕虜九名の顚末記……87
十一月十八日　討伐行……104
十一月二十三日　捕虜銃殺……121
十二月七日　新塘宿営……145
十二月十七日　旅団長来塘……167
十二月二十一日　聖旨伝達……180
十二月二十六日　朱村移駐……190
十二月二十八日　献納毛布……196
十二月三十一日　大晦日……205
昭和十四年
一月一日　拝賀式……208
一月二十七日　参謀巡視……250
一月二十九日　工兵隊陣地構築……252
一月三十一日　良民証発給……254

装丁・構成　宇都宮泰長

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

◇第一巻目次（内容）

昭和十二年
九月　召集
入営
十月　門司乗船・出港
富江港入港
富江島見聞記
富江港出港・佐世保入港
佐世保出港
十一月　杭州湾上陸
楓涇鎮附近の戦闘
楓涇鎮における戦闘詳報
嘉善附近の戦闘
嘉興附近の戦闘
嘉興入城
八里店における捕虜虐殺
十一月　湖州地区警備
朝鮮人慰安婦
十二月　湖州出発
漂陽より反転、宜興・長興へ
富陽附近の戦闘
昭和十三年
一月　杭州入城
師団主催慰霊祭
賀陽宮入来
慰安婦配当
慰安所開業

◇第二巻目次

昭和十三年
二月　湖州に再入城
討伐戦闘日誌

掃蕩戦闘概要
湖州帰営
三月　生首随想
遺骨捜索
四月　小堺部隊長離隊
五月　李家巷の戦闘
呂山～紅渓鎮確保
兵員損耗状況
六月　日本ピー開店
不祥事件発生
七月　湖州出発
杭州再入城
杭州出発、上海へ
抗日秘密テロ団
八月　竺家橋籠城
討伐出動

江湾兵舎へ移動
九月　大上陸演習
軍情報
遺骨箱準備
輸送船大破
上海碼頭へ

日中戦争日記　第三巻

凡例

一、本書（第三巻）は、便箋二百五十枚に記された昭和十三年十月一日より昭和十四年一月三十一日までの日記の全文である。

一、内容については、あまりにも個人的な公表をはばかられる箇所は削除した。

一、仮名づかいについては現代仮名づかいに改めたが、文脈から原文のままにしたところがある。

一、誤字脱字、誤記の明らかなものは訂正し、漢字についても現代風に改めた部分がある。（　）内は戦後、説明として追加したものがある。

一、日付、時刻、体温等については表記を漢字に統一した。ただし、引用文についてはそのまま記した部分がある。

一、部隊記号、部隊符号については文字で表記することに統一した。

昭和十三年

十月一日　小雨のち曇

乗船二時三十分～三時二十分。長以下百七十名。すじかいに寝る。黄浦江は小雨に濡れている。フランス租界が夜景を描いている。（午前四時）

夜明けと共に呉淞（ウーソン）へ出航しかけたが、飯田桟橋から引き返して慶空寺附近中流に碇泊した。甲板に裸で出てみると涼しい。船内は真夏以上の暑さ。第二東洋丸の下には黄浦江の流れに骨折り乍ら櫓を漕いで、軍用船から投げ出される缶、箱、残飯を狙う水上乞食が群がっている。午後は昼寝、会報も忘れてしまうという有様。連絡下士官集合、日直割り配付される。

日々命令で十月一日が日直副官を命ぜられた。一日、七日、十三日という風に廻るのである。

十月二日　小雨、のち晴（呉淞沖へ出航）

一晩中、船の天井の鉄板からポタリポタリと冷たい雫が顔に落ちて来て、いやな気持で、ともかく夜が明けた。

牟田一等兵が夜中に天幕を張ってくれてからは安心して眠れたけれど、マラリヤ熱発四十度の石松伍長が右脇に寝ているので、足をちぢめて寝る外になかった。便所の臭いと、むせる人の息で苦しい一夜が明けた。持って来た『大地』（島田清次郎作）も読む気がせずにいるうちに、会報で呼ばれて地図受け取りにサロンに上がる。

午前中かかって二〇〇枚の地図をわける。広東を中心としたものばかり。白耶士（バイヤス）湾上空写真四枚は海浜上陸地点を示しているが、砂浜と平坦地が少なく、海岸線から直ぐ山岳地帯をなしている。その他、第二十一軍司令官訓示、台湾軍司令部、参謀本部、広東軍情、住民一般の注意事項など、極秘書類も分配された。幾十日の後にはこの地に上がる噂はよく当たるものである。

朝食をすますと、甲板から麦俵を船底の馬繋場へ投げ落とす。切り藁らしい俵もある。それに乾草等、戦争には何から何まで必要。

今日は口を洗って飯を食った。昨日は洗う水もなかった。昨日夕方から日々命令で、

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

水の使用は水筒一本に限ることとなった。顔は三十日乗船以来洗わない。入浴も洗濯も出来ない。船内では汗はポタリポタリと落ちる。(十一時五十五分)

十三時三十分より甲板上の人払いをすませた第二東洋丸は呉淞へ下るのであろう。風が甲板から舞いこんで来て涼しい。裸で日記をつけ、『大地』を読む。大久保伍長のチャンチュウで顔が真っ赤になったのを感じる。

馬は船底に一区画毎に入っているが、人間という名の兵隊の方は区切りがないので、割り込んだり、手を出したり、足を伸ばしたりで、昼夜を通して苦しいってない。

揚子江は広い。然し泥水が流れている。その中に二十四艘の御用船が浮いている。夕暮れ時の河口の美しさは又格別である。東の空と西の空とでは、異なった色彩を織り出していて、自然の無技巧の色の美を見せられる心持ちがする。夕陽を受けた水は美しい。船内で賭博場を開帳している兵隊がいる。打つ、買う、飲むの三拍子と、戦争とは人間から離れないものであろう。有賀曹長、写真を呉れる。江湾鎮兵舎の思い出となる。『大地』を少し読む。書物は余り読めない。

十月三日　小雨のち曇（航海第一日）

雲、低く垂れて、小雨模様である。同じく数艘碇泊している。揚子江の水、泥色を呈している。払暁から冷え出す。昨夜は石松伍長と色々のことを話した。石松伍長は『九州日報』の「中支戦線を行く」は自分の文章に酷似しているという。筆者は客員とか。

病院船がいつの間にか浮かんでいる。真っ白な巨体の美しいこと。そして緑の一線が胴の上部にひかれ、中央に赤十字が真っ赤についている。二本のマストにも赤十字が夫々一つ宛書かれ、スマートな船である。真っ黒な貨物船の中にあって、これ一つが化粧している。

「看護兵の手をかりずに一発で死にたいもんだ」と言って、話し合っている兵隊もある。こうした病院船も整い、又各隊では戦死、戦傷、行方不明表迄揃えて待っている。この兵隊の中の何割かが、この表に載せられたり、沖の病院船に運ばれたりする事がわかり切っているけれども、これが戦争である。皆、同じ様に食い、同じ様に寝て、戦闘開始を待っている。この貨物船内のすし詰めの生活では、ともかく早く陸に上がった方がいい、運命が決定した方がいい、と皆言うし、又、事実、そうである。若し

兵の輸送に一等船客の取り扱いでもしだしたら、戦争も出来まいし、国がそれ丈の資力を持つものなら、最早、戦争の必要もあるまい。結局、戦争は理屈は何とか巧妙につけるけれども、欠乏がさせるものである。恐らく戦争前も欠乏に堪え、戦争中は兵隊も銃後の国民も等しく欠乏と闘い、戦争が終わってからも、相当の年月の間、この呪わしい欠乏と面つき合わせなければならぬものであろう。

午後二時に出帆するという。（夜八時二十分記）

朝から起重機で船底の馬糞搬出をやり出した。

昨日はサロンで東京中央放送局のラジオ・ニュースを聴いた。貨物船でもサロンは美しい部屋である。カーテンはブルーのあみ布、すべてが瀟洒（しょうしゃ）に出来ていて一寸悪くないと思う。雑誌、其の他の軽い読物も備えつけてある。然し、海上生活はいいものではない。我々は海上に住んで、初めて陸の有り難味がわかった。

欧羅巴への旅がしてみたい。大きな旅をする毎に、人間は成長を遂げて行くものであると思う。広東攻略が済めば満期であろうが、今度はかなり沢山の兵隊が戦没しなければなるまい。人間の一生、人間の運命なんてものは、砂一粒程の権威もない。

エンジンの音がする。賭博の小銭の音がする。ハーモニカの音がする。今夜より燈

火管制が行われる(十時)。対潜監視哨を船首と対空監視哨を船尾に、一つは聯隊砲、一つは機銃班が担当、警戒に当たっている。

洗濯が出来ぬと言ってしきりにこぼす。風呂がないと言ってしきりに不平を言う。戦場を平常の寸法で行こうというわけである。察するに兵隊は異なった情況下にだまって従うことが出来ぬとみえる。つまり、本当の辛抱強さを持たない。命令に服従する、それは小心から、これをはねつけ得ない根性ではあるまいか。

十四時四十分、船は南へ向かって出発した。濁流を蹴って四方に低い島を見乍ら進んだ。

十六時四十分、船の進路は依然として東南方、揚子江の一部か、支那大陸の一部か、それとも島嶼か、ともかく、マッチの棒を浮かべたように、緑に一線を画して、水平線をおさえている。水は濁っているが浪が少し高くなって来た。船も揺れ出した。早く、東支那海に出て、水の澄んだ海を見たい気がする。それがたとえ死への近づきではあっても。少し胸がむかつく。

十九時、甲板上に上がってみると、水が澄んで来た。然し澄み切ってはいない。やや澄んで来た。浪は依然として高い。

十月四日　晴（航海第二日）

七時十五分、起きて甲板に出る。全くの紺碧の海水の中に、この船、一艘が航海を続けている。四方を見ても何ものもなく、青い海原だけがある。雲は少し高くなり、太陽の輝きが少し漏れている。進路は南。

朝食、一箸食った時、大揺れが来たので止めて、床へ飛び上がった。昼には一杯だけ食った。

昨夜はかなり吐く者も多く、便所迄行けず、すぐ甲板で吐いたと見えて、広い範囲にわたって汚れていた。夜のうちはレコードを鳴らす者もあってよかったが、今日はもうその気持もないとみえる。航海の苦しみは女の出産にも匹敵するものではあるまいか。たとえようもなくいやなものである。

ほまれ二個、スリーキャッスル一個、ラビー・クイン一個五本、計百十本のタバコも三十日〜三日の午前中で吸ってしまって、すっかり切れてしまった。酒保は今日から開設したが、タバコだって一人一個、他の品物も凡そこんな風な売り方である。

エンジンのジーンという音と、波が船側を洗うザアーという音と、時々馬がはねる音、兵隊は皆、体を横たえてしまって、酔うまいとして警戒している。十四時近くな

った。暑くなって来た。南下を続けているが、今頃はどの辺りであろうか。

指揮班に羊羹をおごる者があった。Tというのが飯は真っ先に喰らう。自己宣伝をする癖がある。補充兵であり乍ら、上げ膳、据え膳である。

十四時三十分、船は大海原の中にぽつんとして一つ進んでいる。船員に聞くと、大島の西方附近を南下中という。大分暑くなって来た。明日一日中、航海を続け、明後日台湾附近に到着するらしい。

会報はなかった。本夜より燈火管制に入った。皆、気分の悪いままで、横になった。船は益々大揺れに揺れ出した。

十月五日　雨（航海第三日）

目がさめてみると、船が大分揺れているのを感じる。それと同時に裸で寝ていたので腹を少しこわしたらしい。早速、甲板上に上がってみる。暴風雨である。大暴風を蹴って船は矢張り南下している。大粒の雨がシャツをたたく。

大揺れの甲板上に歩哨はちゃんと立っている。五、六名真っ暗の中に裸の兵隊が居る。スコールに似たこの南の大洋の雨を体に受けて、入浴代わりにする心組みらしい。

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com